

過去に学ぼうとする姿勢 — 知的武装のためのメディアセンター —

やなぎまち いさお
柳町 功

(湘南藤沢メディアセンター所長)



なぜこうも企業不祥事が継続して起こるのだろうか。2017年10月にもまた、日本企業史の大きな汚点となる神戸製鋼による検査データ改ざん問題が世に知られるところとなった。実はこの「検査データ改ざん」事件は、近年だけでも三菱自動車、スズキ、日産自動車といった日本を代表する有名自動車メーカーにおいて頻発している。事件を起こした企業は言うまでもなく社会から厳しく糾弾され、経営トップは顧客の信頼回復に努めると低姿勢を貫く。そのこと自体誤りではない。しかし、時間が経過し世論の厳しさが薄れていくと、再び似たような事件が別の会社で発生する。

企業の問題は、最終的には企業の最高意思決定権者（トップマネジメント）の責任に帰せられる。組織の長として、最高責任者なのだから当然である。しかし近年の場合、最高責任者自身が不祥事の当事者となるケースが少なくない。世間に公表したくない事実を隠蔽し、市場や顧客を欺く姿勢は、結局組織内部からも信頼を失い企業価値は地に落ちてしまう。「トップマネジメントの劣化」などと批判されるのも当然である。

もちろん市場から高く評価され、尊敬に値する企業は確かに存在する。しかしそうでない企業のトップがあまりにも目につく。彼らに共通する要素が「過去に学ぼうとする姿勢」の欠如であり、その結果としての市場に対する緊張感の欠如ではないだろうか。

永遠に輝き続ける企業などあるとは思えない。実際に企業の歴史は試行錯誤の連続であり、多くの失敗といくつかの成功の連続であろう。その成功も、時間の経過とともに失敗となってしまふ。その失敗にも次の段階への成功の芽が生まれるだろう。過去に対する徹底的な検証が必要なのは、まさにこのためである。過去の輝かしい成功体験にいつまでも浸っているわけにもいかない。反対に過去の重大失敗にいつまでも打ちひしがれている必要もない。

私の研究を簡単に紹介すると、日本と韓国の企業家に関し、歴史的視点から比較し考察することである。企業史研究にとって社史は不可欠であり、企業家史研究にとって自叙伝や回顧録は不可欠な文献である。しかし当事者の作ったそれらの情報は、100パーセントすべてが客観的事実だとは言えない。むしろ、思い切り主観的ですからある。自慢話（!）の連続かもしれない。それが当然であろう。

企業史研究や企業家史研究の「面白さ」は、そうした当事者の語る歴史の隙間を見つけ、もろもろの情報を集め埋めていく作業にある。当事者にとってはあまり触れてほしくない部分を歴史的事実として拾い出し、当事者の発表する「公式的な歴史」に加え、それらをトータルとして描くことによって始めてその企業や企業家の「本当の姿」に接近できると考えている。

「過去に学ぼうとする姿勢」は、冒頭述べた通り企業のトップマネジメントに不可欠な要素である。われわれ研究者は学術的な視点から企業や企業家の「本当の姿」を追求するのであるが、トップマネジメントにとっては、言うまでもなく十分なエネルギーを投入すべき課題である。現在学びの中にある学生諸君は、将来のトップマネジメント候補生として、今から緊張感をもって過去に学んで欲しい。メディアセンターの存在は、そうした問題意識を持つ学生諸君が知的武装するための最大最強の援軍である。

最後に推薦図書を一冊挙げたい。『池田成彬伝』（今村武雄. 東京, 慶応通信, 1962, 416p.）。慶應義塾の大先輩である池田成彬（1867～1950）が困難な時代に向き合い、三井財閥をどのように防衛したか是非学んで欲しい。